

令和5年度第2回二宮町施設一体型小中一貫教育校設置研究会

日時：令和5年8月23日（水）9：30～11：30

場所：二宮町役場 第一会議室

出席者：17名

原会長、山内副会長、片岡会員、渡邊会員、小林会員、三好会員、村田会員、
協会員、和田会員、中西会員、北川会員、伊庭会員、藤田会員、杉本会員、
野谷会員、森会員、渡辺会員

欠席者：6名

池田会員、八幡会員、宮戸会員、齋藤会員、岡野会員、藤原会員

傍聴者：なし

配布資料：・次第

- ・2023年度第2回施設一体型小中一貫教育校設置研究会スライド
- ・資料1 小規模校のメリットとデメリット
- ・資料2 不登校児童生徒の状況
- ・参考資料1 学校の小規模化について、不登校の発生状況
- ・参考資料2 二宮小学校の喫緊の課題
- ・参考資料3 二宮町施設一体型小中一貫教育校設置研究会名簿

1. 開会

2. 会長あいさつ

- ・毎日酷暑で子どもたちの健康面でも気がかりなところがたくさんあるが、本日は子どもたちをめぐる喫緊の課題を中心に協議していく。

3. 協議

(1) 二宮町小中学校の喫緊の課題と施設一体型小中一貫教育校設置の意義

会長：本日は2点ある。一つ目は、二宮町の小中学校における喫緊の課題と施設一体型小中一貫教育校の意義について。本日出された課題と施設一体型との関係性、或いは意義の繋がりについては、次回考えていく。二つ目は、にのみや学園開校後の各校の様子について。

初めにこちらから2点課題提起する。学校の小規模化（参考資料1）と不登校（参考資料2）について。その他、各会員さんから二宮小学校の喫緊の課題や学校関係の課題、小中一貫教育について知らないことについてどうなのか、といったことが事前に提示された。各グループの中で、その他の課題を出し合っていたきたい。

喫緊の課題の捉え方については、子どもたちの課題や目指す子ども像に沿って見

たときの課題性ということで絞っていきたい。目指す子ども像は大きく三つ、それとこれに関わるキーワードとしては「地域を愛する」「世界と自然につながる」など、いろいろな言葉が出されているが、こうした願いやこんな子どもに育ってほしいという思いを持って進めてきた研究会なので、そこに関わる課題として、例えば、この状況が改善されないと、目指す子ども像には近づけないのではないかといった視点で協議をしていただきたい。課題を出したら、それがなぜ問題なのか、課題性があるのかというところまで、グループの中で掘り下げてほしい。

初めに、小規模化について。一色小学校の単級状況がこの先も続くと思われること、それから二宮西中学校が2学級か3学級であること。二宮小学校と二宮中学校は、急激な減少ということはなさそう。小規模のメリットとデメリットは資料1でまとめている。

次に、二宮町は児童生徒数が減少傾向にあるが、その中で学校に行けない子どもたちは、数字的に増えている。不登校とは、年度内に30日以上欠席した児童生徒を長期欠席者として、文部科学省が毎年調査をしており、その調査結果から、次にある表やグラフが出される。ここに出ている数字だけではない子どもたちの生きづらさ、学校への行きづらさについては、感じたり話を聞いたりしていると思う。ここに出てきている数字よりも、たくさんの小中学生が、学校への行きづらさを感じている。また、欠席日数が年間30日未満の子どもでも、学校を休んでいる子どもたちはいる。これは二宮だけの問題ではなく、国全体の課題で、非常に膨大な資料、データを集めて、報告書等も作っているのだから、その報告書の中から抜粋をして資料2としてまとめている。今提示した課題に加えて各会員さんからの課題提起もご覧いただき、各グループの中で、それ以外も併せて協議をしていただきたいと思う。

●各グループから出された課題（キーワード）

Aグループ

<小規模>

- ・一色小の子 パワフル！大丈夫
- ・二宮小の子 仲良くしようと
- ・山西小の子 柔軟、広い心
- ・二宮中・西中 どちらもOK
- ・保護者 小：心配 中：心配解消

<小中一貫>

- ・小小、小中交流
- ・3校交流 キャンプなど
- ・小学校が中学校体験（9, 10, 2月の3回）
- ・二宮中の養護教諭 二宮小から来た先生なので very good! 人事異動に工夫できないか

<居場所>

- ・教室に居づらい子がいる
- ・スペース、スタッフ、場所と人の確保が難しい

<プール他>

- ・水泳の授業 プールを作る、管理、清掃、消毒
- ・水泳 着衣、5年、1回のみ
- ・水難事故防止、ライフセーバー、教材、1日1学年
- ・施設再編
- ・室内プールをぜひ！
- ・掃除管理を学校（教員）の負担ではなく
- ・学校施設が（子どもが新校舎に行った後）プール等が残る
- ・町民が利用できる、「民間をうまくつなぐ」

Bグループ

<少子化>

- ・単級：課題解決難しい
- ・小規模化 将来西中2学級&教科担任
- ・小規模化 一色小の先生方からの聞き取り（参考資料1）

<不登校>

- ・30日不登校→学ぶことをゴールに
- ・校内教育支援センター
- ・NPO、フリースクール 選択肢が広がった
- ・↑ネットワークの構築
- ・大きな学校にない。NPO、フリースクールも中に取り込むことができる
- ・多様性の尊重
- ・大規模、小規模ともに多様性あり→小規模は多様性とのかわりが求められる

<他>

- ・学校の良さは、共感する人との出逢い

Cグループ

- ・全校にほっとルーム（一色小のように）
- ・小中ギャップ 取り組み実施中

- ・地域との交流 町ぐるみで子どもの見守り
- ・水泳指導 回数が少ない、水に慣れる機会
- ・トイレ 使いにくい 二宮中1階
- ・登下校 バス、自転車、中学の部活

Dグループ

<小中一貫>

- ・実感がわからない
- ・子どもにとって意味ある？
- ・一貫校として共通の行事
- ・地域の行事への参加少ない
- ・部活 再登校の見直し
- ・小中一貫の共有は2学期～
- ・小学校の部活体験の回数
- ・緊急時の対応を5校統一
- ・中学の先生との連絡手段の統一
- ・登下校時の荷物の重さ考え直す
- ・中学の部活を広くとらえてほしい
- ・先生方への研修（変化に追いつけるように）
- ・インクルーシブ校の実現
- ・中身・内容をもっと伝える

<多様性>

- ・多種多様な考え・価値観、多様な家庭背景と学校としての秩序は？
- ・家庭教育の多様性と学校
- ・校内の秩序 自由と統一、学校に特徴を

<PTA・子ども会>

- ・PTA 任意加入が進んだら・・・
- ・子ども会の加入が少ない
- ・名札を無料に（小学校）

<ハード面・校舎・暑さ対策・プール>

- ・暑さ対策 ミストシャワー
- ・体育館にクーラー
- ・エアコン設置優先（プールより）

- ・校舎の老朽化
- ・プール 町全体の課題
- ・現校舎の修繕と今後の見直し

<一色小への配慮>

- ・一色地区 わくわく各中学校を結ぶバス
- ・一色・中里 スクールバス（通学バス）

<その他>

- ・給食 みんなでわいわい復活
- ・化学物質過敏症への配慮
- ・制服 マイノリティの声を大事に

●課題整理

会員：一色小学校の小規模化は、あまり心配しなくて良いという意見である。私たち大人や保護者は、一色小の子が二宮中に行って大丈夫かなとすごく心配している。しかし、実際中学生になるとうまくいっている。なぜなら、二宮小と山西小の子どもたちがものすごくいい子だからという言い方をされている。それは、すぐに同化し、一色小の子が別になることなく、二宮の子はその辺りとても仲良くできる。子ども同士がうまく融合して仲間になろうとか、とても柔軟で広い心を持った小学生だからということだった。けれども、子どもも保護者も小学校の頃はとても心配なので、小学校同士の交流、小中の交流をたくさん行くと良いだろうという意見だった。3校の交流として昔はキャンプがあったが、そういったものが増えるとよいと思う。また中学校探検として、二宮小と一色小の子が二宮中に行き、山西小と一色小の子が西中に行き、中学生の部活やいろんな光景が見ることで、子どもたちの不安の解消に繋がると思う。中学校探検はこれまで年1回だったが今年から9月、10月、2月の3回に増えるようです。

会長：小規模校、大規模校の両方にメリットやデメリットがあるが、一番大きな問題としては、例えば、小学校が単級の場合、一年生、二年生のときに課題があった時に、それを解決しにくい構造があるということだと捉えている。

中学校は、教科担任制なので、職員の配置が大変難しい。教員数は学級数によって割り振られるので、学級数が少なければ教員の数は少なくなる。そうすると、例えば国語において、全学年の国語を教えないといけない。今は教科外の免許で教えている先生はいないそうですが、そういった問題も今後出てくれば、国語の教員でありながら家庭科も教えるとか、なかなか普段授業研究しづらい教科を持たざるを得ないということが、中学校の小規模校では起きているということを聞いている。

会員：Dグループも小規模化の話は出ていないが、「一色地区への配慮」として、一色小学校区の子が二宮中、西中に分かれて進学すると遠くて、雨の日は自転車が使えないなどの理由から、そういったところへの配慮が喫緊ではないかという保護者の声があった。例えば、わくわくひろばから各中学校へスクールバスを出すなど通学にも考慮して欲しいといった意見が出た。

会長：これは小中一貫校を作るにあたっての通学路の問題ということですね。

会員：教室に居づらい子がいる。そういう子のためにスペースがあればよいのだが、場所と人員の問題で、特別な場所を作ることは少し難しい。中学校は保健室登校というような形があるとのことですが、ここでも出てきた話として、二宮中の養護教諭が、二宮小の養護教諭をしていた方で、保健室に行くときから知っているのも、すごく居心地が良いらしく、これはとてもよい結果になっているようです。先生の方が小中一貫教育をおこなっている。同じ大人が6歳から15歳までの子どもをずっと見ることができるということで、一つ具体的な提案として、人事異動の際に、少し工夫していただくと現場としては嬉しい。

会長：先ほどの一色小学校への配慮の話と同様に、施設一体型を作っていく過程で、或いは施設一体型の性質そのもので改善が見込まれるところがあるので、こちらと合わせて、第3回で話をしていきたいと思う。

会員：ほっとルームのことが話題になった。なかなか集団に馴染めないお子さんをいかにして学校に引き込むかということで、とても良い発想だなと思う。一方でその子どもたちの家庭の育ちだとか、或いは子ども一人ひとりの特性をどのように理解して、その子が居やすい関わり方をどのように担保できるかということについては、部屋だけ用意しても、またただ放っておくわけにいかないのが専門家が必要だろう。専門家となると、人探しも、その人件費等もあるので簡単にはいかななくて、現状、支援員さんを配置して一色小学校は始められたということです。

会長：大きい学校では、なかなか部屋数もなく、そういった中でいかにして優先的に使えるような場所を確保するかということは、学校も行政も意識して学校づくり、或いは共通配置ということを考えていかなければならないと思う。

会員：小中ギャップというのはどう関係するかですが、例えば小学校では、割とフランクに話し合えるような学校生活であったものが、中学校に行くと急に人間関係とか規律というものがクローズアップされ、そこに戸惑いを覚えて学校生活や部活、勉強の難しさにもついていけなくなる。ギャップを埋めてあげる、或いは低くしてあげることも一つの配慮ですが、もっと将来的な社会に出ることを考えたときには、それを教えてあげることも必要なのではないか。そうすると、教職員レベルでいけば、小学校中学校の教員がそれぞれの世界を知った上で、自分たちの仕事をしていくことがこれから必要で、今それは異校種の交流体験をする中で、お互いを知ろうとしているところなのでこれからだねという話です。

会長：小中一貫に関わるというところでは、例えば今、校長先生がおっしゃったように、ほっとルームを作ってもそこに合わない子もいる。本日、文部科学省の資料を資料2として配付したが、そこにもあるように、背景やきっかけは多種多様で、一人ひとり違います。その違いに対応した形を、それだけの種類用意できない現実があるので、文科省の記録を見ても、決め手というものはない。ただ、少なくともできるだけその中でも学校に行けるようにするにはどうしたらいいかということで、本日の資料の中にも、どんな学校だったら行きやすいかといった質問に対する回答も載せた。これはまた後日、先ほどの新しい学校を作る時に考えていかないといけないということだと思うので、一緒にテーマとして入れていきたいと思う。

会員：Bグループでは、まず不登校のこの前に、子どもたちの多様性を尊重することがまず議論としてあり、例えば一色小のように小さな学校でも、二宮小のように大きな学校でも多様性があると認識している。その時に大きい学校だと多様性があるところに、そのグループに固まっていけるが、小規模だと多様性がある人たちと直接関わらないといけないということが求められるという状況は、かなり違う点だろうと認識した。その上で不登校の話ですが、不登校とは30日学校に行かないということだが、その日数の問題ではなく、最終的にその学校で、学ぶことをどうやって推進しようかということが目的なのだろうなと思っているので、一色小のほっとルームのような教育支援センターがあったり、或いはそれ以外にも、NPOやフリースクールのような選択肢が広がってきているのが現実だと思う。例えば、参考資料1の図のNPO、フリースクールに対して教育委員会が委託ということも将来的に可能性があると思う。委託までいかななくても将来的にはそういったところとのネットワークを構築するようなことができると、にのみや学園を少し大きな形にして、そういった外部のところも取り込むことができれば、よりその多様性に対応ができるのではないかという意見があった。

会長：例えば、学校に行けないならば、フリースクールに行けばいいのではないかという話ではなくて、保護者にとってその地域の学校に行けないということは、心配や不安があり、子どもにとっても負担やデメリットが大きい。そのため、地域の学校の中にいろんな機能が入ってくるということは、これから求められると子どもたちの声や様子を見ていて思う。すぐにできることを探していかないと、まさに喫緊の課題です。その辺は次回話し合いをしていきたいと思う。

次に、Cのトイレの問題お願いします。いただいた資料の中にも、課題として出されていた。

会員：和式トイレが使えない、座れないという話のようです。では、予算を取って洋式便器を増やしていくのか、或いはトイレも多機能化しているので、家庭と同じようにはなかなか無理だと思うが、機能を付けていくと、充実して居心地の良い学校の一つとして考えられるのではないか。どこまで対応するかという問題だが、いずれに

しても、和式が設置されている現状だと使いにくいと感じている子どもたちが多いのは確かです。

会長：新しい学校を作っていく時に、例えば、高齢者がどんどん学校に入ってくるような、そういう環境を作るのだとしたら、やはりトイレは洋式でないといけない。このように、子どもたちだけのことではなく、地域全体として、学校というものを一つの財産として施設として考えるならば、そういった視点でもこのトイレ問題は重要かと思う。その他、トイレ以外に学校設備ということで、Dグループが出しているのをお願いします。

会員：学校設備のことでは大きく二つ。一つは暑さ対策ということで、例えば体育館にクーラーを設置する。体育の授業だけでなく、体育館に集まった時の地域の防災も含めて体育館にクーラーを設置する意見が出た。もう一つは校舎の老朽化ということで、何年も前から出ているけれども今年も大規模修繕をやっている学校もあるし、校舎の修繕と今後の見通しのようなものは、これからの配置の中に入れて考えていくという話です。他市町ではミストシャワーを配布しているという話があった。また、プールは町全体の課題ではないか。各学校にプールがないので、授業がないという状況はわかるけれども、温水プールもない、袖が浦もない中で山西プールを小学校に優先して使ってもらいたい意見もある。

会長：体育館にクーラーということで今、中学校の部活動で体育館を使う時に何か工夫していますか。

会員：扇風機は近くの子は涼しいけれど、風が来なければ意味がない。スポットクーラーは、美術室やエアコンのない大きな教室に使っていて、スポットクーラーがフロアにあると、活動の邪魔になってしまい使えないです。

会長：体育館が何度くらいあるか測っていますか。

会員：体育館には必ず温度計をつけなければいけない。去年の山西小だと 32 度、33 度だったことはよく覚えていて、今年は今、西中の体育館を改修しているので最近温度を測っていませんが暑いです。

会員：今、西中の体育館が工事で使えないので、バスケット部などが町立体育館で活動しているが、クーラーの部屋があるらしく、何時間かに 1 回クーラーの部屋で涼ませているようです。

D グループで一番話が盛り上がったのは、小中一貫教育のソフト面の部分で、実際に小中一貫教育が分離型で始まり、これから一貫教育になってくる中で、実感が湧かないとか、子どもにとって意味があるのか、まだまだ中身や内容が伝わっていない現実があるというところで、もっと町民へ周知することはもちろんですが、小学校同士、中学校同士、あと学区外の西中と一色小、山西小のように同じ学区内の小中の情報共有を密にしていくことが大事なのではないかと思う。例えば、緊急時の学校の連絡手段を統一していくとか、中学に上がると生徒が直接学校休みます

といった連絡する手段が電話だったり、クラスルームを使ったりしているけれども、そういった手段を共有してより使いやすくしていくとか、全部を統一することがいいとは思わないし、地域性ももちろんあるけれども、そういった共有を先生同士でこうしていこうということがあってもいいのではないか。部活に関しても、お弁当を持って部活に行く学校と、1回帰ってご飯を食べてから暑い中出かけていく学校といった部分も学校の差がある。

その他、共通の行事やインクルーシブ教育、個別最適化など今の教育は急激な変化が始まっている中で、現場の先生たちが変化に追いついていけるようなサポートや研修などをしていくことが、結局のところ子どもたちを幸せにするのではないかとといった意見が出た。

その他の部分では、給食はそろそろ黙食やめてみんなでわいわい食べることを復活させて欲しい、平塚市では化学物質過敏症に対してみんなで配慮しましょうとホームページに載せているようですが、苦しんでいる子どもたちへの配慮、今制服検討委員会が始まっているが、制服についてはマイノリティの子たちの声をどれだけ聞き取れるかという話をした。

会長：それでは、カテゴリーがいくつかまとまっているので、それぞれ、施設一体型小中一貫教育校をどうやって作っていくのかということとの関連性を、次回整理して皆さんに提示したいと思う。

ここで、分離型小中一貫校が4月から始まり、一緒に活動している様子を副会長から話していただきます。

副会長：小小交流、小中交流について、普段は各学校で行っている放課後子ども教室を、推進員の3人で企画して、8月17日にラディアンのホール以外のすべての部屋を借りて、3小合同でやらせていただいた。図書館ツアーやウクレレ、楽器、プログラミング体験、川柳教室、昔遊び、段ボール、紙粘土細工などを行った。また、3校全ての子ども教室のサポーターに入っている大学生のお兄さんの部屋を設定し、そこでボードゲーム、人生相談的なこともやってくれたのが良かった。

子どもたちに、にのみや学園を知っているか聞いたら、みんなにのみや学園をちゃんと知っていた。今は学校が施設分離型だけど、いつか一緒になることも知っていた。逆に、大人たちの方が知らないのではないか。

また、何か記念のグッズを作ろうという話の中で、今お見せしているガーラント作りをし、今年度中の色々な行事で飾りとして使っていくことになった。自然塾の方が綺麗な段ボールを手に入れA3の大きさに切り出すところから穴を開けて用意してくださり、「にのみや学園」が2本、「にのみや学園二宮小」「にのみや学園一色小」「にのみや学園山西小」の5本ほどできました。もう一つは「祝にのみや学園」という塗り絵ですけど、あれは二宮中出身で、今アニメーターになるための勉強をしている先輩が書いてくれた。それに色を塗って、パウチし今ラディアンの中央通

路のところをいっぱい貼ってあるので、どうぞご覧ください。毎年プログラミングをしてくれる方がいて、そこに二宮中の生徒さんがサポーターとして参加し、あと2回は、その方の代わりに講師になってみんなに教えることになっている。

会長：中学生が教える様子はどのようなものでしたか。

副会長：プログラミングに関してはサポーターとしてですが、例えば塗り絵は、美術部か工芸部かの中学生の女の子がやってくれて上手なので、小学生はしっかりと見ていて、中学生がいつにもなくいい顔をしていて、小さな子を見ると「おう！」と言ってくれるので良いところを見せようと頑張るみたいで、兄弟のようなそういった感じになっていた。

会長：今の放課後子ども教室は、教育委員会の生涯学習課の事業でもあるので、紹介させていただいた。また、学校に電話すると電話を取られた方が「はい。にのみや学園、何々小学校、中学校です」と言う。そういうところでも、意識の統一といえますか、醸成といえますか、そういったところが図られていると実感します。

(2) にのみや学園開校後の各校の様子

会長：事前に質問事項が6点ある。①ワーキンググループのカリキュラム研究乗り入れ事業を重ねてスタートしたが、このような経緯の中で、先生方は小中一貫教育の必要性をどのように捉えているのでしょうか。②小中の学習指導や生活指導の仕方の違いについて現在どのような状況でしょうか。③分離型として今から取り組もうと考えていることは何でしょうか。④分離型としてすぐには難しいが、いずれ取り組みたいということは何でしょうか。⑤一体型では可能だけれども分離型で不可能な取り組みは何でしょうか。⑥一体型の実現に期待していることは何でしょうか。

会員：3、4年前から小学校の先生と中学校の先生が、それぞれの学校に行き、授業を見たり、一日生活をしたりする中で、中学校の先生は、小学校に行き、こういう子たちが中学校に来るということを知ることがものすごく大事なことです。逆に小学校の先生は、中学校に行ったり中学校で少し授業をしてみたりすることで、中学校ではこういう学習をするのだから小学校時代にこういうことを教えておかなければいけないということを自覚することがものすごく大切なことです。先生方がお互いの学校を知ることから始まっていて、今年も小学校の音楽の先生が、中学校の吹奏楽に少し関わろうという先生も出てきていますし、小学校の先生が自発的に中学校で少し生活させてほしいと申し出て行っています。その中で先生たちは、9年間で子どもを育てるんだということの自覚が少しずつ出てきたことは間違いなくあります。そして、子どもたちの教育的ニーズは非常に多岐にわたるので、先生方が6年間と3年間の9年間で、これからの世の中を生きていける、学力であったり社会性であったりも含めて、そういったものの基礎基本を子どもたちに身につけさせてあげようというのが、この小中一貫の大事な根幹になっていると思う。

では、なぜ二宮町は文科省が言っている主体的対話的で深い学びの実現に向けて授業をしているのか。これは一体何かということは、一般の人たちには浸透していない考え方ですが、今、Society 5.0の時代だと言われている。Society 1.0の社会というのは、縄文時代で狩猟生活です。何千年、何万年続くわけです。ところが、Society 2.0の社会は、農耕社会になり、これは弥生から江戸時代までです。Society 3.0の社会は、工業の時代です。これが日本の戦争が終わった後の高度経済成長に関わってくる。Society 4.0の社会は、情報化社会です。この何千年、何万年単位の1.0が、次の2.0は短くなり、3.0の時代はもっと短くなり、4.0の情報化社会が短くなって、今まさにこのAIが入ってきたこの地球全体規模のSociety 5.0の時代に入ってきた。今の小中学生が社会を支える労働者となる時代には、仕事をリタイアされた多くの人たちの生活を支えながら、自分の生活のためにも働かなければいけない。今の子どもたちは、そんな世の中を生きていくんだということを考えたときに、これからの未知の世の中を生きていけるたくましい子どもたちの基礎をいかにこの9年間で教えてやろうという使命感を持たなければいけないと思っている。そこで出てきたのが、主体的対話的ということ。太平洋戦争の時代は、命令に従う人材を作ってきた。戦後は、会社などの方針やミッションに対して的確に能率よく正確に仕事をこなせるような人材を作ってきた。ところが、これからの子どもたちは、主体的対話的の中で、自分で課題を持ったり、いろんな人と協働したりしながら答えを見つけていく、最適なものを探していける、そういった資質能力を養いなさいということで、こういった教育が始まった。今二宮町がやっている主体的対話的の授業をするためには、教室はどういう状態でなければいけないかと言ったときに、30人なり40人なりの全てのクラスメイトが、それぞれに相手を思い合ったり、相手の意見に対してきちっと受け止めたり、お互いを認め合ったり、いろんな人と協力し合ったり、そうやって受容的で一人も取り残さないよ、みんなで一緒に学んでいくよ、という学級集団を作ろうとしているから、小学校から六つの手だてというハンドサインを通して、いい雰囲気学級が今相当増えています。小学校の中でどの学級もすごく良くなっている。現実的に、学力的にも成果が出ていると私は思っている。二宮の中学生も含めて、みんなが一緒に学べる雰囲気になっていると思っている。

にのみや学園は、「認め合う、高め合う、にのみやの子」という目標の中でいろいろやっていて、そのランドデザインをもとに、それぞれの小中学校の校長先生が、各学校のランドデザインを作っている。その根底にあるのが、誰一人取り残さないよ、みんなで学び合うよ、お互いに認め合って助け合っていくよということで、それを着実に今やっているのが、にのみや学園だと理解してください。

にのみや学園は、施設分離型の小中一貫教育校として今年度からスタートしたばかりで、1学期にいろんな計画を練り、夏休みには二宮西中学校の生徒が山西小学

校の学童へ行き、勉強を教えたり一緒に遊んだり、そういった交流が始まった。また2学期以降は、小学校同士の交流や小中の交流として部活動体験も回数を増やすことなどが計画されている。これから小学校同士または小中学校同士で交流が始まってくるので、子どもたちの中でもにのみや学園らしさを感じられていくのではないかと期待している。

今考えている施設一体型のメリットは、一つの施設に小中学生がいれば、教員も保護者も子どもたちも、私たちはここで9年間生活するんだなと体で感じるはずで。先生たちも一緒に、いろんなところでミーティングができる、絶えず低学年の子は上級生を見ているし、上級生は下の子どもたちの手前、きちっとした振る舞いもできるだろうし、一体型になることによって、気持ちの部分の一体感が生まれるのは間違いないかなと思う。今私たちは分離型教育をしているので、それぞれの学校では、それぞれの学校の1日1日で精一杯の部分が正直言ってありますが、そこを少しずつ交流させることで二宮町の同じ小中学生なんだということが、これから期待できるかなと思う。本当に施設一体型になれば、一気に小中一貫教育が加速していこうと想像している。

最後になるが、施設一体型になれば、当然分離型の良さが集まってくるが、逆に一緒になることによって、それに適用できないことがいろいろと課題として出てくると思う。ただ、その課題については、想像だけでは解決方法を見いだせないと思うので、今私たちは分離型でできることをお互いにやりながら、この子どもたちを、きちんと将来、世の中に出していけるための教育をしているということを、保護者や地域の人たちも同じ気持ちになって子どもたちを見ていただけると、それが「小中一貫教育にのみや学園」という感覚になっていくのかなと思っている。学校はそれぞれのホームページなどで活動を発信している。広報にのみやでも時々この小中一貫教育のことを取り上げていただいている。決して情報発信をしていないわけではないので、ご覧になっていただきたいと思う。毎日広報活動をしているのではなく教育活動をしている。それを所々で一生懸命プリントにしたり、保護者プリントだけではなくホームページで見られるようにしたり、いろいろ宣伝をしているつもりなので、ぜひご覧いただけるといいかなと思う。

会長：先生方の思いは同じだと思う。熱い思いで子どもたちを育ててくださっているところですので、そこはしっかりと私たちも受けとめていきたいと思う。それでは最後に、たくさんの方から声を集めてくださった会員さんがいるので、紹介していただけますか。

会員：私は地域の代表として参加させていただいて思うが、私なりに地区の中学校の役員さん、小学校の役員さんにヒアリングをしてみとめてきたことをD班で一通り発表させていただいた。ハード面と学校の問題を提示したが、子どもたちは学校だけで学ぶのではない。少子高齢化や核家族が進み、各学校の役員さんをはじめ、地域の

組織的な役員のなり手がいないことは、前から地区長会においても大きな課題なので取り組んでいる。そして、子どもを取り巻く環境が変化していることについては、私どもの地区においては、子ども会に子ども全体の2分の1しか加入していない状況である。そして今の子どもたちは、外との関わりが少ない現状であると思っており、各地域で今まで歩んできた文化歴史伝統、例えばお祭りや盆踊りなどそういったものは地域の特性であり、人と人が触れ合うことで、人間的な関わりを持ち、子どもが健全に過ごす教育、地域とともに育てる場であると考えているので、地域として継承していく必要があるのではないかと感じている。各地域において、夏の盆踊り大会が、だんだんなくなってきて、現在、5地区で盆踊りをやめていく状況の中で、先ほど言ったように、子どもたちが、実際、地域の人たちと、友達と触れ合って成長していくのではないかとということで、先ほど先生がおっしゃっていたように、教育の場合は9年間を通して、例えば社会に出たときに、子どもたちが社会に対応できるような、そういう人間形成をしていくということが大きな目標ではないかと思っているので、子どもたちが社会に出て一生涯活動していくうえで、自己管理能力を十分身につけて、社会の中で生き抜く力をつけていただければと思うので、地域も努力するつもりでいる。

会長：独自にプリントを作ってそれを関係の皆さんに配って、回答を集めてくださった。本当にありがとうございました。それをまた財産としてさせていただくので、教育委員会の方でも受け止めていただきたいと思います。

それから、事前をお願いをさせていただいたことは、今後も積極的にやっていきたいと思っている。広報活動も大事ですが、やはり主体的に関わる場をできるだけ作っていききたいということで、皆さんにご協力いただきました。ありがとうございました。

4. 閉会